

工學博士 直木倫太郎著

再版
技術生活より

名著100選図書

り

56.5.26

登録	昭和	年	月	日
番号	第	24062	号	
社団法人	土木学会			
附属	土木図書館			

再版の序

この小著を讀んで何だか全體の調子が馬鹿に濕つばいではないか、矢鱈に陰氣な不平づくめ泣言づくめで持切つて、我御互ひの意氣を抑損せしむる許りか、若く新しき技術家達にとつては尙更雄々しく乗出さんずる折角の出端を叩いて濫りに其威勢を取拉ぐが如き懸念のあるのが不得心だと云つた風の批評を聞かぬでない。縦し著者に取つてこの書の本旨がたゞ徒らなる不平と泣言の羅列を目的としたのでないとは云へ、着實な老成家から見ても或はさうした氣遣ひの起

るも無理ではなからう。然しそれでも可い、凡そ今日まで『技術』のため『技術家』のため主として斯かる老成家によつて爲された言説そのものゝ内容とし云へば遺憾ながら随分と空虚な生温るな上滑りな感想や興味の反覆ではなかつたらうか。形容澤山な工業發展策、核心に觸れぬ技術家大成論、それは恰も技術學校の卒業式の晴やかな玻璃窓に反響するに適したお定まり演説から格別の隔りを持たぬ程度の刺戟ではなかつたらうか。若い人達の爲に卒業式からも尙引續いて何時までそんな軽い浮調子で呑氣な催眠歌を謡へば氣が濟むと云ふのか。御互ひ技術家として、殊に若ければ若い

程ますゝ、眞劍に懸命にその立場を自覺しその本分を理解し及びその將來を力強く權威付けむが爲に必要な自省と發憤と努力とを要望すること最も切なる今日、御互ひは何故實社會を背景とした各自の『技術生活』上のあらゆる經驗に立つて心から味得し嘗盡したる限りのものを是非善惡共に飽迄如實に痛切に將た徹底的に披瀝し提唱して、切れば血の出る生々しき感激と衝動とに御互ひを刺戟し鼓舞し反省し合はふとはせぬのである。僕の小著の如き固より云ふには足らねど、若しその泣言づくめの故を以て若い技術家にほ餘り讀ませたくないと言ふならば、僕は却て若い人達にこそ

尙更讀むて貰いたく思ふ、若し全篇を通じて或濕つばい陰氣な基調の深へるを蔽ふ能はずんば、それこそ寧ろ今の技術界の餘義なき事態を幾分如實に反襯し得たるものとして一段その省慮に資すべき理由が存するからである。本書を作つた所以の動機も亦畢竟其處にあるからである。

昨春この小著を取纏めた頃は恰も歐州大亂の餘澤として我民間事業界の活躍が如何にも目覺しくつれて我技術家の凡てが又到る處に頗る珍重され優待されはては四方から引張合の寔に稀有な好景氣であつた、今もその景氣は相當に持續けられつゝあるが、然かもこれによつて直に『技術家』そ

のものゝ眞價が新しく定まり若くはその權威が正當に認められたと爲すが如きは如何である。腕さへあれば職工でも無闇と引張合はれたではないか。金に釣られ金に誘はれ甚しきは金に魅せられて却て技術家の徳義と信用とを瀆した例さへ生じたではないか。御互ひが眞から社會の理解と尊敬とを贏ち得やうとするにはまだ申々の工風が入る、然かもその工風が此有頂天となつた今の場合では却て容易く思索し能はざるではあるまいか。無論機會を捉へて飽迄我地歩を進むるはよい、今の景氣は斯界の爲に願ふてもない仕合せである。が、最後に殘る問題は依然として御互ひの深き省慮

と沈思と及びそれから生み出さるゝ自覺の大小如何に歸せざるを得ぬ。技術家各自の自覺は固より大きな團體としての自覺。然かもそれは格別世間の景氣不景氣によつて左右さるべき事柄ではあるまい。と、これが僕の此書を公けにするに就ての皮肉であつて、又竊に痛快がる所以である。

僕は今でも依然として『技術』の世界に不安を感じ、『技術家』の將來に狐疑を抱ける一人である。縦し今日のやうに技術の價値が認められて、技術家が八方から引張合はるゝ事態を見ても、それで以て直に安價な泰平樂を頌する氣にはなれぬ。かと云つて、それでは飽迄技術を咀ひ技術家を蔑み

するかと云へば、さうでもない。理論の正しきを追へば何うしても今後の世界は技術のものである、技術家の天下である。科學を根柢として立つより外なき時勢に、その科學を實行に導く所以の鎖鑰を握れる御互ひは、是非共一面には國家の行政に、一面には社會の事業に、その正當なる立場を主張し且つ認識されなければならぬと信せざるを得ぬ。にも拘らずこれを事實の問題として看る時、其處には尙千々に焦慮し嗟歎すべきものがある。僕が世間の景氣と不景氣とに同せず、眞から御互に技術家の運命を探討すべく多少ともその方面に意を用ゐる筆を呵するの謂れは其處にある。

本書は此意味に於てたゞ僅に其緒論を發したゞけである。幾度か實社會の若き經驗に揉まれ虐げられ來つた揚句の不平等と失望と煩悶とを先づありの儘に打明けて御互ひの猛省を要求したるに止まるものである。云はゞ御互ひの問題を問題として取扱つたに止まつて未だ多く其問題の解決に對する關鍵に觸れては居らぬ、即ち全篇に亘つて幾多の苦味滋味を帶ぶるも亦餘儀なき沙汰である。が僕に取つては此過程の如實の告白も確に斯界に對する最も忠實な一つの義務だと信ずると同時に、今後尙引續き若干の思索を發表せんが爲にも亦必要なる一つの段取りだと思はざるを得ぬ。若し

夫れ此小著を機縁に幕地『技術生活』の眞諦を高唱し、女々しき我等が量見の不備不徹底を喝破し去る底の獅子吼を誘致し得んには、それこそ又何んなに御互ひの仕合せであらう。實は僕自身としてもこの小著を以てたゞ、尙に自家の技術家觀を練らんが爲の一過程と見做せるのであつて、何れは近くこれを繼ぎ繼ぐ小著を書足して次第にその觀念を纏めて見たいと念じ且つ怠らざる心得である。自家衷心の疑訝困惑懊惱から生み出さるゝ眞面目を根據として究め且つ稽ふる所、やがてはこの疑惑も煩悶も遂にその行盡す所に行盡して止まる時、反て歡喜に溢るゝ手強さを以て逆しまに自己を

反撥鼓動せしむる底の積極的感激を味得し能ふを信ぜざるを得ぬ。此篇に説いた『技術即事業』の信念乃至『覺めたる聲』の期待の如き、又畢竟その道程に向つて進む一つの手強き道標であつて、僕の今後は寧ろ此積極味の確立と敷衍と實行との方面に専らその歩武を擧げ且つ説盡せすむば止まざるものである。

無論何時まで不平や泣言をのみ陳ねて居るべき時代ではない。御互ひが大きく目を開き、腕を張つて我『技術』と『技術家』の爲に其主張其權威其勢力を正當に將來的確に社會の表に活現せしめねばならぬ。僕の不平も泣言も固より此

一篇にて打切らねばならぬ。而して僕は此陰氣な序幕を開づると同時に、次の陽氣な花やかな一幕に向つてその趣向を案せねばならぬ。

僕の思索は今『技術』と『人』との交渉に向つて進められつゝある。要は『技術』あつての『人』か『人』あつての『技術』か。『技術』重きか『人』重きか。結句『技術』とは『人格』を離れて獨立的に存在し能ふものか否か。先づ此點に若干の理解を立て、見たいと思ひつゝある。世間一般は固よりのこと、實は技術家自身でさへ随分此邊の分別が模糊として爲に間誤ついたり間誤つかされたりして居る

ことの多いのみならず、現に、その餘波が種々の方面に飛散つて、『技術』そのものゝ爲にも、『技術家』御互ひの爲にも種々の障礙と非難と惑亂とを興へつゝあることを思はざるを得ぬ。

云ふ迄もなく、『技術』は『人』の生むだものである。然かも生れた『技術』は最早『人』を離れて能く獨立獨行し得べきものゝ如くに見ゆる。世間では無論さう考へて居る。どの技術家が行つても興へられた問題を解くには只同じ一つの途があるのみだと信じて居る。従つて問題の解決夫自身はこれを尊重するが、技術家其ものまでも併せて尊重するの

要なしと見て居る、それが果して正しいであらうか。素人は尙ほ可なり、技術家同志の間にすら尙ほ往々にしてこんな不量見が出る。丁度數理の絶對的なるを取扱ふに馴れた處からして、又は學校の講義が「シオリ」と「メソッド」の説明に止まる所からして、二と二を乗すれば誰がやつても四である、力學の答案は誰が書いても同じ結果であらねばならぬと信ずる所に、自づと思想の混雜を來して、『技術』は『人』を離れて能く存立し能ふと信ずるのが多い。現に僕も此小著の『退屈』の章下にこんな感違ひの惡分別から生じた不平を包まず書陳ねて見た。が今にして思ふとそれこそ御互ひ『技術家』

が『技術』の下敷にせられて何時までも人間たるの權威を發揮し能はぬ所以の大事な眼目ではないか。僕は是非進むで此問題をもつと徹底的に解析せねばならぬ。丁度此小著の示した序幕の幕切れに『技術即事業』の大見得を切つたが如くに、次幕の見せ場は『技術即人格』を高唱する一齣であらぬばならぬ。『技術』の問題が『金』で解けると思ふは素人の誤りである。『術』で解けると思ふも玄人の誤りである。設計の一線一畫、事業の一張一弛にだも必ず技術家の『人格』そのものが付て廻ることは、縦令は同じ機械でも良い油を注さねば良く動かぬと同じである。要は『人』あつての

『技術』『人格』あつての『事業』。その『人格』の向上を計らずして獨り『技術』の威力の大ならむと欲するは難しとの趣意を成るたけ手強く書下ろして見たいと思ふ。然かも開けて見ぬ二幕目の趣向は兎も角として、御互ひ技術家が社會的に敢て一步を乗出すべき時期は今である、各自が其本分に自覺すべき機運は頗る急である。此小著を再版するに至つた著者の微意も亦自ら其處にある。

大八年三月盡

浪華僻寓にて 著

者 識

はし
が
き
技術家として生立つた僕の過去二十年の感想は何時も残念ながら餘りぞつとしたものではなかつた。がその理由は固より僕自身の氣の持方にもあらうし、僕の選んだ専門の性質にも因らうし、僕の迎つた方向、僕の踏込む道、乃至僕のたづさはつた仕事の所爲にも由るのだから、貧弱な僕一個の経験や感想でもつて漫りに尊敬すべき我技術界を云爲するにも當らず、又左様なことで滅多に是非せらるゝ我技術界でもないことは明かながら、併し僕一人の感想は感想として兎に

はし
が
き

技術家として生立つた僕の過去二十年の感想は何時も残念ながら餘りぞつとしたものではなかつた。がその理由は固より僕自身の氣の持方にもあらうし、僕の選んだ専門の性質にも因らうし、僕の迎つた方向、僕の踏込む道、乃至僕のたづさはつた仕事の所爲にも由るのだから、貧弱な僕一個の経験や感想でもつて漫りに尊敬すべき我技術界を云爲するにも當らず、又左様なことで滅多に是非せらるゝ我技術界でもないことは明かながら、併し僕一人の感想は感想として兎に

はしがき

角想して貰はねばならぬ。費一人の無類の強慾を以て、専門の見る所では「技術」は恐らく今の世界に最も新しい専門である、従て「技術家」なる新しい階級の社會に於ける地位は其稱呼と共にまだ正當に一般に認められては居らぬ、若し稍認められたとすれば、それは却て其眞價以下に見縊られ踏倒されて居ると見るのが正當である。が、其然る所以は格別社會の我儘と横着とからてはなくて、寧ろ洗つて見れば技術家自身の不用意無頓着乃至其怯懦な臆病な引込思案の所爲に歸すべきものが多い。換言すれば技術家自身が其正當なる社會上の位置を自覺し、其偉大なる自家の本分を諒解するよ

り以前に、却て餘りに、その取扱ふべき「數」と「物質」との世界に囚はれ、若しくはその相當に喰つて行ける氣樂さに魅せられて、至極安値な苟且な、然らずんば至極遠慮勝ちな世間知らずの境涯に満足して、無自覺無徹底の生活を生き。さらすば餘りに我特殊の技能を信頼するに馴れて、自惚と獨天狗の陋に墮したる爲めなのである。

若し技術家が科學者と同一の職分を持つべき學者、其ものであり、若くは自分の腕と力とのみを頼りの術のみで働く職人氣取りであり得るならば、それは高く留まるもよい、低く揉手て出るもよい、同時に社會の今の待遇方にも兎角の不平を

云ふべき筋もないが。たゞ併し技術家と云ふ新しき智識階級の正當に持つべき立場は果してそれで満足すべきであらうか。問題は其處にある。

見よ、社會は寧ろ我等の或少數者を尊重するの餘り、却てこれを其窺眉なる専門にのみ押込めて、所謂學者扱ひに祭り上ぐれば足れりと爲すと同時に、残る多數者に向つては即ち悉くこれを平氣に見下して宛然出入りの職人手合と同一視して憚らざるではないか。と思へば又一方には我等技術家を中心とするあらゆる工業の發展を國家の急務として、如何にも我等の研究の足らざる爲めに、其努力の至らぬ爲めに、折角

の機運に乗つた開發伸張の効果の擧げ得られぬを憤るが如くに蒞めき立つてはないか。知らず其何ちらが誤れるか將た何ちらもが誤らざるか。それを糺さんが爲めにも先づ第一に我等技術家自身が其本分を如何に自覺し、其立場を如何に理解し、同時に又如何に手強き意氣と協力とを以て之れを主張し保持しつゝあるかを考へねばなるまい。

僕は茲に斯様な問題を問題として我技術家諸君の前にこれが提供を敢てする、然かも其多くは既に大正三年來、雜誌「工學」に亙つて記載し來つたもので、今更これを冊子に纏めて再び世に問ふ心得ではなかつたが、一つ纏めて見てはとの人

の勧めに、まゝよ何うせ書き散した文毅の、今更何とならうとも、新に若干の文章を書き足して、厚かましくもより廣き技術家諸君の前に突出すことゝしたのである。

斷つて置くが僕は土木科の出身である。縦令氣持ちは一艘の廣き「技術家」諸君を相手取つたつもりでも、説く處には何うも土木臭が抜け切れない、種々の引例の如きが即ちそれであつて、然かも今では早や二三年の古めかしさをさへ免れぬ。とは云へ其處に僕の興味があるのだから、これも致し方なき部類として恕して貰はねばならぬ。

最後に、此書を僕の或過程に於ける感想録だとすればこれ

でもよいが、若し僕の技術家觀だとすると、尙頗る不徹底なものである。が、それはもつと靜にぢつと死ぬまで考へて見ねば解らぬ問題で、茲には只その問題を問題として取扱つて見たに過ぎぬ。それも其筈、僕等は學校に在りて、技術の學と術とは習ふたが、技術の本領、技術家の權威其ものに至つては、全くこれを卒業後の自發に待つべく殘されてあつたやうである。即ち僕等は一人前の技術家として世に出て社會に採まれた揚句に初めて自分で意外の目を見張り案外の思ひを爲して今更のやうに「技術とは何ぞや」「技術家とは何ぞや」と幾度か自分に問ひ返し思ひ返さねばならなかつたのである。

馬鹿げた話のやうではあるがそれが事實である。即ち其處に疑惑となり煩悶となり失望ともなり捨鉢ともなるべき幾多の問題が横はつた。爲めに或は折角志し來つた半生の苦學を捨て、思ひ切りよく我から他の社會に飛去る者も出來た。若くは餘儀なき諦めとなり自制となり満足となり、強ひて此の世界に姑息な不元氣な餘生を託することともなつた。即ち自分を始め左様な人達の多くの舉措を見聞することによつて此著述の動機が作られたことは確かである。でなくともそれは少くとも僕自身の時折りの不満に對する表白其ものであることだけは間違ひの無い點である。

とは云へ、それも詮する所は過去に於ける壺中の小我觀たるに過ぎぬ。昨是今非か、今是來非か、自分は尙もつとく稽へねばならぬ。明窓淨几、自分に許さるべき時のある間、自分は更に深く更に大きく稽へ進めて行く積りである。

大正七年新春大阪にて

著者 識

大正十一年春大別り

夏三翁ノ遺言大志ノ落へ難クノ事ノ起リテある事
 は大志ノ成。即ち吾身自任ノ事なるべし。而も此の事
 なるに感。其理。吾身自任ノ事。其理。吾身自任ノ事。
 も自任ノ事。其理。吾身自任ノ事。其理。吾身自任ノ事。

目次

疑 問……………一

片隅の世界……………一

曰く非常識……………八

何等の皮肉……………一

知られぬ巨人……………三

諦めか満足か……………三

氣 休 め……………三

貧しき分別……………六

沈黙の人……………四

連鎖の有無……………四

本来の立場……………四

口實を去れ..... 六

退囚はれ..... 六

力痛の遺場..... 六

合鍵の多少..... 六

多数の寶..... 六

朱泮漫先生..... 六

犠牲..... 六

暗闇の活動..... 六

拙い立場..... 六

氣高き標語..... 一〇

無限の消極..... 一四

技術家とは何ぞや..... 一七

其本領を如何..... 一七

生温い量見..... 一〇

この意氣込..... 二〇

獨創の才..... 二〇

吞氣千萬..... 二〇

科學と術..... 二〇

自然力の利導..... 二六

點睛を缺く..... 二〇

天地の化に參す..... 二六

技術と經濟..... 二六

技術即事業..... 二六

覺めたる聲..... 二六

齋の耳を疑へ..... 二六

技術家の時代……………一七九

罪は己にあり……………一八六

團體的自覺……………一九六

常識の修養……………二〇七

曉鐘は鳴れり……………二一三

リーディングツブ……………二二八

人として覺めよ……………二三〇

無駄書も……………二三六

呑氣さ加減……………企業家……………たゞそれだけ……………人の問題……………腕の人……………退一步の工夫……………
 經驗……………忘れての後……………其格を破れ……………人生五十年……………職人根性……………未だ何宗とも……………
 斯界の面目……………愚……………土木技師……………新愚公……………技術志願の動機……………靴の裏皮……………數理の
 碎屑……………活きた或もの……………常識……………目潰し……………把燭の經驗……………不退轉……………二十九年間……………
 研究心……………智恵伊豆の用意……………獨逸技術家協會の活動……………米國土木學會の意氣……………分業と
 綜合……………一束の鍵……………新しき運動……………戰爭によつて……………工業戰……………平和的の革命……………技術權

奨令……………技術の職ひ……………勇ましき會合……………不景氣沙汰……………偉大なる同盟……………典雅なる趣味
 ……創意力……………パブリケーション……………科學の二字……………サイエンス、フーリスト……………エフイ
 シエンシー、フーリスト……………研究味……………至言……………後進の爲に闘れ……………職業の仲介……………研究
 を要す……………呑氣過ぎる……………機會の善用……………不眞面目……………筆不性……………經驗の寄與……………時々刻
 々に……………親切な不親切……………ホケツトアツク……………批評眼……………賣藥主義……………氣が利かぬ……………抜
 萃……………卑怯さ……………雜誌閱覽所……………日本ならば……………漫罵……………卒業式……………温味ある講壇……………先
 進後進の融合……………團體として……………笑止なる哉……………仕合せなる哉……………理想……………科學思想……………
 科學教育……………最後に……………

川柳と技術……………四頁

目次終